

今年の春

——高齢者文学人生論

正宗白鳥 (1879-1962)

『今年の春』 「早稲田文学」 1929) (父の死)

『今年の初夏』 (1943) 「八雲」 (母の死)

『今年の秋』 (1959) 「中央公論」 (次弟の死)

『リー兄さん』 (1961) 「群像」 (四弟の死)

人間は耄碌した方がいいんだね。身体が死んで、頭だけが生きていちやたまらん。

自然主義文学者の正宗白鳥は昭和三十七年に膵臓癌により衰弱して死んだ。享年八十三。臨終に際して、植村環牧師にキリスト教への信仰を告白したという。

白鳥の思想は現実に対して醒めた態度をとるシニズムの哲学（シニカルは嘲笑的、皮肉屋の、人を信じない、という意味）で、永遠の不平家とよばれた。キリスト教への信仰とは矛盾するようだが、人間の二面性というものだろうか。

彼はロシア正教の敬虔な信仰者で人道主義者として知られるトルストイの最後について、「妻の怒りを避けてみじめに家出した老人にすぎない」「山の神を恐れ、世を恐れ、おどおどと家を出て、・・・ついに野垂れ死にした」と皮肉り、小林秀雄と論争したことがある。

自分の肉親の死についても、『今年の春』で父の死、『今年の初夏』で母の死、『今年の秋』で次弟の死、『リー兄さん』で四弟の死を冷静に観察し、淡々と書いている。

父は中風で寝たきりになってから、なお十年の寿を保った。時々身体の変調があっても、素質が強靱であるためか、いつも持ち直した。しかし、三月半ばの変調は、いよいよ八十歳歳の長い生命も終局を告ぐる兆候らしかった。或る日、激烈な嘔吐を催し、まったく食欲を失ったのである。



今年の春

—— 高齢者文学人生論

「わしはもう駄目じゃ」と病人は言い、「もう二三日ですなあ」と主治医は息子にささやいた。「精も根も尽きた」と介護疲れの母はつぶやく。

しかし、一週間たっても死ななかつた。人間はそう簡単には死なない。病人はかねて、「死ぬるのは恐れんが、ただ苦痛無しに死にたい」と云っていたのに、その苦痛が訪れたのだ。「苦しい」「いつお参りが出来るだろうか」。

口を利くのに困難を覚え出した病人は、指の先で空中に字を書いて、自分の心中を発表するようになった。「シニタイ」「シネヌ」。

両手は死人の手のように水気がなくなり、身体中がカサカサしていた。だが、最後の血の一滴が消費されるまで頭脳は動いているようだ。

誰かが、「人間は耄碌した方がいいんだね。こういう風に身体が死んで、頭だけが生きてちや、たまらん」と云った。息子は老病父の生の苦死の苦を想像して、それが万人の苦であると感じた。こういう場合のために、うまく発明された宗教の阿片もこの老病父には何の効果もなかった。

ところが、息子は若い頃、植村正久や内村鑑三の影響を受けて、キリスト教の洗礼を受けたことを思い出したのか、自分の死の順番が来たとき、宗教の阿片を吸ったのである。それで苦痛が軽減されたかどうか。本人にしかわからない。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも

そまらずただようふ

若山牧水